

# トツプ直撃

豆腐は四角くて白だけじゃない。グループの豆腐メーカーが「感豆富(かんととみ)」「ブランド」を立ち上げ、「大豆のプリン」を開発した。グループが持つ食品、機械、包装資材の各事業の総力を「三位一体」で結集し、斬新なパッケージや、いままでない食感を生み出すことができたという。(中田達也)

「大豆のプリン」の反響はどのようなものですか

「期待以上です。われわれ『さとの雪』の豆腐は、大豆と水、にがりだけで安心安全に作るというオーソドックスな商品開発だったのが、ついに一歩踏み出したという印象が強いようです」

「大豆のプリン」

「抹茶」「ほうじ茶」の3種類の特徴は

「なめらかさ、濃厚さ、おいしさですね。これが豆腐かという驚きがあり、全く違う食感を得られます。上品な甘味のある和三盆糖(わさんぼんとつ)、抹茶は京都、小豆も北海道産など、素材にこだわっています」

「業界は過当競争や価格競争、少子高齢化による人口減少という環境でせめぎ合っています。豆腐そのものにも十分価値があるのですが、大豆食の違う価値を見いだせないかと考えたのがきっかけですね。技術的な人材で圧倒的な違いがあると自負しているのが、『感豆富』というブランドを作る際に、豆乳の加工技術、充填(じゅうてん)など製造プロセス、容器の差別化やデザイン力、マーケティングなど、人材を駆使すればこういうことができる」と証明したという思いがありました

「豆腐とは一線を画したパッケージですが、包装資材事業の技術が生かされているそうです」

「地元徳島を象徴する色で、東京五輪のロゴにも使われている藍色を使っています。豆腐が並ぶ棚に置いて一番主張する色を選びました。実は自社の包装資材は、これまで値段の関係で自社の豆腐の容器には使っていませんでした」

「食品充填にも強いそうです」

## グループのさとの雪食品が「大豆プリン」開発

「日本のカップ入りのヨーグルトは6割くらいうちの充填機が使われています。この技術を使って小豆入り大豆プリンの充填技術に応用しました。食品事業と包装資材事業、機械事業の三位一体で製品ができています」

「大豆のプリン」の反響はどのようなものですか

「期待以上です。われわれ『さとの雪』の豆腐は、大豆と水、にがりだけで安心安全に作るというオーソドックスな商品開発だったのが、ついに一歩踏み出したという印象が強いようです」

「大豆のプリン」

「抹茶」「ほうじ茶」の3種類の特徴は

「なめらかさ、濃厚さ、おいしさですね。これが豆腐かという驚きがあり、全く違う食感を得られます。上品な甘味のある和三盆糖(わさんぼんとつ)、抹茶は京都、小豆も北海道産など、素材にこだわっています」



# 経営姿勢にも「新食感」

「会社メモ」機械、包装資材、食品の3事業を手がける。本社・徳島県。1961年設立、2018年3月期の売上高46.1億円。グループ従業員数1229人(18年4月現在)。豆腐など大豆加工食品を手がけるグループ会社、さとの雪食品は今年3月、新ブランド「感豆富」の第一弾として大豆のプリンを発売した。

機械メーカーの技術力も売りだ(右)

「化学品や食品のタンクを作っていました。創業期のヤクルトさんと懇意で、ヤクルトさんが容器をガラスからプラスチックに変えようとしたときに機械メーカーに転身しました」

「紙パックの牛乳に使われる充填機も日本で初めて取り組んだとか」

「乳業メーカーが成長し、スーパーで売る方法として紙容器が増えました。当時は国内に充填機メーカーがいなかったのが、国産メーカーとして手を挙げました。機械屋は受注生産なので、常に新しいことをやらないと次がないんですね。それが危機感になっています」

「豆腐の生産を始めたのは1973年ですね。豆腐メーカーさんから受注をいただき、能力の高い豆腐製造機を作ったことがきっかけです。これをベースに豆腐を産業化しようということになりました」

「今後の展開は、特に関東では、まだまだ認知度が低いので、『感豆富』ブランドが営業のきっかけになればいいと思います」



「豆腐の現状は二極化しています。うちも1丁178円の豆腐を作っていますが、ドラッグストアでは30円の豆腐も売られています」

「大豆のプリン」は税込257円で全国のスーパーマーケットの豆腐売り場で展開します。スーパーさんも単位面積当たりの売上高を増やすことができるので、価格競争から価値競争へ一石を投じたつもりです」

「目標を教えてください」

「商品そのものの売り上げや利益もさることながら、こういうものを作っていくという第一弾の商品として、会社の姿勢を示すことが重要だと考えています」

「創業時はタンクメーカーだったそうですが」

「会社メモ」機械、包装資材、食品の3事業を手がける。本社・徳島県。1961年設立、2018年3月期の売上高46.1億円。グループ従業員数1229人(18年4月現在)。豆腐など大豆加工食品を手がけるグループ会社、さとの雪食品は今年3月、新ブランド「感豆富」の第一弾として大豆のプリンを発売した。

機械メーカーの技術力も売りだ(右)

「化学品や食品のタンクを作っていました。創業期のヤクルトさんと懇意で、ヤクルトさんが容器をガラスからプラスチックに変えようとしたときに機械メーカーに転身しました」

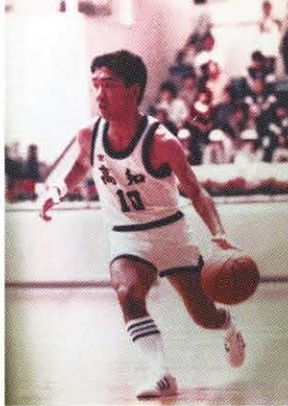
「紙パックの牛乳に使われる充填機も日本で初めて取り組んだとか」

「乳業メーカーが成長し、スーパーで売る方法として紙容器が増えました。当時は国内に充填機メーカーがいなかったのが、国産メーカーとして手を挙げました。機械屋は受注生産なので、常に新しいことをやらないと次がないんですね。それが危機感になっています」

「豆腐の生産を始めたのは1973年ですね。豆腐メーカーさんから受注をいただき、能力の高い豆腐製造機を作ったことがきっかけです。これをベースに豆腐を産業化しようということになりました」

「今後の展開は、特に関東では、まだまだ認知度が低いので、『感豆富』ブランドが営業のきっかけになればいいと思います」

## 田隊選手みたいだったんですが、みんな信じてくれません



「結婚」創業者の三女と見合い結婚したことをきっかけに銀行を辞めて四国化工機に入社した。「銀行の取引先だったのですが、会社のことは全然分かりませんでした」

「留学」入社後、米国に3年間留学した。「ビジネススクールでは相当勉強しましたね。英語は、授業ではある程度分かるんですが、ディベートになると何を言っているのかわからないので分かったようなふりしたり。人生で初めて円形脱毛症ができたほどで、ある意味、社長業よりたいへんでしたね」

「家族」妻と1男2女。「長男は昔の私と同じように米国留学中です」

「バスケット」土佐高校時代はバスケットボール部で四国大会優勝。慶応大でも体育会だった。「ポジションはガード。いまの田隊勇太選手みたいだったんですが、みんな信じてくれません」

徳島県バスケットボール協会の会

「バスケットボールで高知県代表として奈良国体に出場」

「(ゴルフ)ベストスコアは74。」

「(お酒)『350mlサイズのビールの後、ワインのボトルを半分ぐらい空けます」

「(座右の銘)『練習は不可能を可能にする』「慶應義塾の塾長を務めた小泉信三さんの言葉です。負けるということは練習不足なんだと考えています。勝てない相手に勝つのは練習しかないんです。経営も大きい会社と競合することはしょっちゅうありますが、普段からの準備や狙いがおかしいから負けるのだと考えています」

長を務める。日本協会が混乱した際には監事として事態の收拾に当たり、「川淵三郎さんが会長に就任したのを機に引き継ぎました」。

「(囲碁)「のめり込んだのは大学で就職が決まってからで、毎日のように碁会所に出かけました。最初は弱すぎて誰も相手にしてくれなかったんですが、毎日行くと相手にしてくれて、1カ月ぐらいたつと勝てるようになりました」

武宮正樹九段に揮毫(きごう)してもらった本権(ほんかや)の碁盤

「結婚」創業者の三女と見合い結婚したことをきっかけに銀行を辞めて四国化工機に入社した。「銀行の取引先だったのですが、会社のことは全然分かりませんでした」

「留学」入社後、米国に3年間留学した。「ビジネススクールでは相当勉強しましたね。英語は、授業ではある程度分かるんですが、ディベートになると何を言っているのかわからないので分かったようなふりしたり。人生で初めて円形脱毛症ができたほどで、ある意味、社長業よりたいへんでしたね」

「家族」妻と1男2女。「長男は昔の私と同じように米国留学中です」

「バスケット」土佐高校時代はバスケットボール部で四国大会優勝。慶応大でも体育会だった。「ポジションはガード。いまの田隊勇太選手みたいだったんですが、みんな信じてくれません」

徳島県バスケットボール協会の会

「バスケットボールで高知県代表として奈良国体に出場」

「(ゴルフ)ベストスコアは74。」

「(お酒)『350mlサイズのビールの後、ワインのボトルを半分ぐらい空けます」

「(座右の銘)『練習は不可能を可能にする』「慶應義塾の塾長を務めた小泉信三さんの言葉です。負けるということは練習不足なんだと考えています。勝てない相手に勝つのは練習しかないんです。経営も大きい会社と競合することはしょっちゅうありますが、普段からの準備や狙いがおかしいから負けるのだと考えています」

長を務める。日本協会が混乱した際には監事として事態の收拾に当たり、「川淵三郎さんが会長に就任したのを機に引き継ぎました」。

「(囲碁)「のめり込んだのは大学で就職が決まってからで、毎日のように碁会所に出かけました。最初は弱すぎて誰も相手にしてくれなかったんですが、毎日行くと相手にしてくれて、1カ月ぐらいたつと勝てるようになりました」

武宮正樹九段に揮毫(きごう)してもらった本権(ほんかや)の碁盤

「食品」「包装資材」「機械」事業の三位一体で

うた・しげる 1958年5月15日生まれ、60歳。徳島県出身。年米ミシガン大学大学院経営学修士(MBA)取得。93年常務取締役の代表取締役社長も兼務する。